

「為せば成る」鷹巢峠

一羽の鷹が、山を越えて「ユー」と飛んで行った。雨模様の水田地帯を行く一行の平坦な道が、間もなく終わろうとしている。坂道の始まりに道標があった。奥には山深い杉木立の道が続いている。

「イトー、何て書いてあるの？」

「米沢街道と書いてあります。米沢に向かう道です。米沢から来る人たちは越後街道と呼んでるみたいです。目的地の名前をつけるんですね」

「なんだか、険しそうだなわね」

「はい、これから米沢までは13の峠を越えて行かなければなりません。平らな道はほとんどありませんので、気をつけて行きましょう」

「YONEZASAか、どんなくらなんですかね」

「そうですね、さきほど一羽の鷹が飛んでいきましたが、今から50年ほど前、米沢藩にはとても有名な大名がいました。上杉鷹山。鷹はホーク、山はマウンテン。ホークマウンテンですわね」

「ホークマウンテンは、何で有名なの？」

「貧乏な藩で儉約と産業育成をすすめ、財政を立て直したからです」

「へえ、こんな山の奥にそんな立派な人がいたんだ」

「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、為さぬは人の為さぬるなりけり」

If you do it, you can do it, if you cannot do it, because yo donot do it」

「意味の深いような言葉ね」

「そうですね。バードさんの誰も行こうとしないこの旅のことを言ってるみたい」

「c」

「みんな無理だろうと思っっているバードさんの旅、為せばなるです。さあ、行きましょ。最初の峠は鷹巣峠。ホークネストです」

「あら、イトーちゃんいい」といいわね。元気が出てくるわ」

一行は、坂道を歩き出した。新潟までの道中では、峠があっても馬に乗れたから、落馬の可能性があったり、背中が痛んだりしたが、それでも歩かなくて良い分だけ楽だった。

一歩一歩足を前に出しながら、バードは故郷イギリスの公園のできごとを思い出していた。

ルーシー（バード）とヘンリエッタはある時、公園に遊びに出かけた。すると、肩に険しい顔をした大きな鳥を乗せたおじさんが、歩いてくる

「えー！何この鳥。どうしたのおじさん」

おじさんがにっこり笑った。

「お嬢さん方、姉妹だね。よく似てる。この鳥は、鷹っていうんだ」

「何で、肩に乗せてるの？」

「この鳥は、力の強い鳥でね、飛んで行って獲物を捕まえるんだよ」

「えー？獲物って？」

「例えば穴に住んでるウサギなんかを捕まえるんだよ」

「でも、おじさんの肩の上からどうして逃げないの？」

「それは、子供の頃から飼っていて、慣らしているんだ。

だから、たいいていのいうことは聞く。いいかい、見ててご覧」

そういと、鳥おじさんは鷹を大きな手袋をはめた右手に乗せ換えると、空に向かって放り出した。

「飛べ、ホーキングーあの教会の上空を一回りして、戻って来い！」



ヒューっと飛び上がった鷹は、一直線に教会に向かって飛び、とんがった屋根を三回まわって、おじさんの腕の上に戻って来た。

パチパチパチパチ！

バードとヘンリエッタは、思わず拍手をした。

そんなことを考えながら歩くバードたちは、鷹巣峠の難所二重坂にさしかかった。ここから熊坂と呼ばれる山腹の道を登ると二つ目の頂上につく。そこを下ると山の中なのになぜか田んぼがある。そこからもう一度坂を登ると鷹巣峠の頂上に達する。この二つの坂は大変急な坂で、旅人たちを悩ませていた。

二つ目の頂上で一服すると、イトーが話し出した。なんでも、鷹巣峠にさしかかる少し手前の大豪邸は、渡辺家のもので、財政難の米沢藩に金を貸して財を成したという。また、この地方は、温泉が特に多く5つほどの温泉がある。

特に鷹には縁があつたようで、高瀬温泉というのは川辺のあし原の瀬から、鷹が飛び立つのを何げなく見ていた農民が、次の日も次の日も、同じ様子が続いたので、不思議に思い行ってみると、くぼみの中から湯が出ているのを見つけた。それが高瀬温泉の名前の由来となつた。

「バードさん、この峠の下を流れる荒川の対岸に、鷹巣温泉があります。昔、荒川を歩き来る舟人が、一羽の傷ついた大鷹が、河原の水たまりで水あびをしているのを見つけ、不思議に思い、その水たまりを調べたところ、湯が湧き出ているのを発見しました。そして、そこを掘り下げ、石を積んで湯治場にしたんだそうです」

「時間があればゆっくり温泉にでも入りたいところだけど、先は長いからね」

そういうと、バードは立ち上がって、歩き始めた。荷物を積んだ馬も、イトーものろのろと

続いていく。